

運は、自ら選ぶことができぬ、まさに運命である。戦地に行き、生きて還った者は、多かれ、少なかれ運命によって帰還できたと実感しているのである。

例えば、米潜水艦「タウトグ号」は魚雷を前部に七発、計十四発搭載して我が船団の来るのをキャッチし待ち構えていた。そして、敵潜のレーダー網に捕捉されたのが、午後六時四十分、魚雷発射は八時二十一分、阿鼻叫喚が嘘のように静寂に戻ったのは午後九時頃で、その時は「日蓮丸」「白雲」は海底に消えたという。

この事実は秘匿され、戦死を知らない遺族が多数おられるという。まさに運不運の別れ目である。その中には羅南部隊満期除隊者も含まれていた。

従軍中の食物散見

京都府 矢野 美三雄

私は昭和十七（一九四二）年二月二十五日、故国を立ち、従軍期間約四年八カ月間、海軍の後方支援の兵站部経理事務であったが、いかに補給が大切であるかを痛感した。大国の米国は食糧の確保が勝利の第一条件であることを充分認識していた。日本の敗戦の一大要因は食をおろそかにしたからであると思う。

日本は日清・日露の大戦には食は現地で徴発した。即ち略奪という野蛮な悪業が公然と行われていたのである。およそ戦争で聖戦という美名で殺人行為が行われてよいであろうか。残酷な非人情的戦闘は断じて許されない。勤皇佐幕の動乱の時期を経て明治維新の大業となった。日本も先進国並に軍備を持ち建軍がなされたのである。古語に

「衣食足りて礼節を知る」とあるが、それは今も昔も変わっていないと思う。

陸軍は陸上戦闘なる故、食糧は現地調達可能であるが、海軍は軍艦で「板子一枚下地獄」の例えで上は提督から下は一兵卒まで一蓮托生である。その点陸軍より食生活を重んじて主計科を置き、食糧や被服の優遇をしてきたことは評価する。昔から衣食住というが私はこの順序は衣食住が当然であると思う。

敵弾雨霰の戦闘で重傷し出血多量や悪疫悪寒で苦しむ一刻を争う時はまず手当が第一である。敵弾にて手をやられ、ぶらぶらさげて退つて来た兵士に上官は「何故戦死しなかったか、敵前逃亡は銃殺するぞ」と叱咤している悲惨さや、脚部に盲貫銃創で枯枝を杖に落ちのびて来た下士官を軍医官は麻酔なしで鋸で切断し、泣き叫ぶ負傷者に「命が惜しくないか辛抱せい」と正に地獄絵図を眼の辺にしたことが五十七年後の今でも思い出されるのである。

日露戦争の頃、真下飛泉という郷土近くの詩人が「ここはお国の何百里」に始まる軍歌『戦友』をもとのされたが、その哀調と余りにも実感をあらわした悲哀さが厭戦感をそそると言われ後には歌われなかったが、私の中学時代には配属将校や教練教官の指導で行事の意気高揚によく歌ったものである。海軍の軍歌には「四面海なる帝国を守る海軍軍人は 平時戦時の分かちなく 強敵風波に当たるなら」正に文字通りで一艦にては艦長以下、上下のけじめはあったが常に自然との戦いで、その中で仲良くやっていたようだ。

話は前後するが、敗戦後の抑留生活でいつ帰国できるか、敵様次第であった折、医薬品を取り扱う衛生隊等ではアルコールを適当に配合して代用酒としていたようで、元より専門家であるから衛生面は考えての嗜好品であった。昔より「命あつての物種、畑あつての芋種」と老人がいつていたのを思い出すが、戦闘で命をとりとめたら次は食

糧が大切であった。

満蒙進出時代の大陸では少年義勇軍の制度で年若い元気な少年が内地茨城県内原の農場で訓練を受け、勇躍渡満して匪賊から身を守るため武装もし食糧生産に励んだ。屯田兵の昭和版である。

その若人も敗戦後、行方杳^{やう}として知れず、未帰還で父母にまみえることなく、子を待つ両親も死去され、誠に悲しいことであった。

私の場合も実母の健在を期待し、祈りつつ還つて来たのに、慈母は二年前に既に死んでいた、という悲しみを味わったので、子の帰りを一刻千秋の思いで待つておられた御両親の心情と同じ引揚者の気持ちに察せられ誠に同情にたえぬ。

海軍ではABC包圍線をいかにのがれ、貧弱な貧乏国日本を救い、有利に戦況を展開するかという軍の最高方針で、太平洋の諸島を緒戦ではつぎつぎ占領していったが、ミッドウエーの失敗でだんだん不利、敗戦になったことは幾多の戦史や記録文学で書かれているところであるが、一度ひ

ろげた風呂敷のたたみようがなかったのだ。

開戦直前、連合艦隊司令長官山本五十六元帥が天皇陛下の御下問に対して「半年か一年はどうかやってみましょう」と申し上げたと聞く。

歴史は絶えず繰り返す。

明治の賢臣や名將は日清戦争の直後の三国干渉にも歯を食いしぼりがまんして国力の充実や軍備の蓄積につとめ、日露の大戦に勝利を収めたのであるが、戦をするにはいつ矛を納めるか、また仲裁は友好国に頼みいかに有利にするか正に征戦より政戦が大切であると思う。

鎖国時代のヨーロッパでの唯一の貿易を許されたオランダが今次大戦では敵となった。第二次世界大戦では日露戦争時同盟を結んでいたイギリスと戦い、第一次世界大戦の時の敵国ドイツとは今次大戦では日独伊防共協定を結び枢軸国となった。昨日の敵は今日の友であり、その反対でもあ

海軍の食糧配給は広範囲の島々に海軍の特務艦の食糧運搬艦が行ったといえ制海権・制空権も皆なく、特務艦の任務も戦争末期では全くのお手上げであった。そこで現地栽培がされるようになった。即ち食糧生産隊の開設である。

私の所属していた海軍経理部は海軍の会計経理の元締で、海軍省経理局主任出納官吏より経理部分任出納官吏へ分割した経費が送金されてくるので、艦船主計長へ必要な経費の俸給、物品代の支給を行う。海軍徴備船舶への給料の立て替えもした。これは徴備船本社と海軍本省にて生産されるが、戦地では出先の経理部と徴備船舶船長の間で立て替えし、経理部はこれを本省へ電報した。

他の任務は軍会計上指導監督や問題に対する協議から、戦地で押収した戦利品や恤兵金^{じゆへいきん}、慰問品、戦時特別給与品、酒保物品、休養施設の開設や経営被服品の製造等々でこれらの業務は随分多岐であったが、これらは主に経理面の業務である。しかしこれらの業務に優先して食事の炊飯が

第一で、特に交戦時には食べることが先であった。

敵が上陸して来てからは敗戦色濃厚となり、南方開発金庫発行の軍票は反故に等しくなっていたが、引き退りの戦法で任地バリックパンを下がる時には、私は経理担当であったから、苦力に重い軍票の梱包を担がせ、叱咤しつつ山中をさまよったものである。

後日知ったのであるが軍票の発行者が軍票賠償の算定の基礎となることで、再び引き返し、山中に置き去りして来たのを難儀の上回収し、抑留地の焼場で全部焼却処分した。これは大変な苦勞で戦況有利な緒戦では思いもつかなかった追憶である。

秦の始皇帝は思想弾圧で焚書をしたが、これは優者の横暴で、我々の札幌きは敗者の苦しみで一段と暑かった。

交戦状態に入ってから算盤は不要であった。

主計科の下士官の指揮指導で飯炊きしたが戦友が飯の煙で艦砲に狙われ戦死した。

戦闘食の握り飯を第一線へ運ぶのも主計隊の務めで、私の同じ係で敵上陸までは給与係の一員として手助けしてもらっていた年下のT君にも、この運搬の役が回って来たので、ただでも危険なこととは嫌なものでありまた主計隊は銃も執らず刀も手にせぬいわば非戦闘員であるが致し方なかった。敵弾雨霰の中を任務果たしてT君が帰って来たのを見てほっとした。

先年、私は彼の生地長野県を訪れたが、彼は真言宗智山派の末寺の住職として人望厚く、永年保護司を務められ、男子三人のお子も立派に成人され、孫共々両親を慰め孝養をつくされているとのことでした。住職夫妻は境内の近くに畑を耕し果樹園もやって、なかなか理想的な宗教家であると感心した。

食糧生産隊のことでは任地バリックパンの状況が思い浮かぶ。常態では海軍の糧食の調達は軍

需部所掌であり、同部の下士官が糧食の買い出しに行き部隊に供給していた。

負け戦になった日本軍に対しては原住民も野菜の供出を拒否したが、これは致し方ないことであつた。そこで戦地では食糧生産隊が編成され、主計科士官を隊長に農林学校出身の若い元気な青年が専門学業を実地に生かし、鋤を取って食糧生産の花形として従軍して来た。もとより当地には戦前より雄飛していた野村東印度殖産や漁業ではボルネオ水産等が進出して戦争に協力していたのである。

生産隊が実際に活動し、その重要性が認識されたのは昭和十九年後半であるが、食糧の確保は戦争では欠くべからざる柱である。考えて見るに勝っている時の日常生活に必要な基本的食糧品目としては米、小麦、野菜、食肉、魚肉、果物であるが、これ以外にコーヒー、酒類などの飲料品も必要である。果物はバナナ類、パイヤ、ドリア

ン、マンゴー、マンゴスティン、ランプタン、ナンカなどの熱帯性果物が豊富で味と香りがあった。コーヒーもジャワなどの現地産のもので充分であり、当然必要な砂糖もドングロスの袋詰め、石油産地の当地には対岸のジャワ島より移入されていた。内地では甘味料などは見たくても眼に入らなかつた昭和十七年頃の統制経済の配給時には、ほんとの貴重品であつた。それでも軍が優先で民間では「勝つまでは欲しがりません」の標語で洗脳され意思の統一がなされていたのも苦しいことではあつたが思い出の一端である。

食肉類としては、牛肉は街の支那人（中国人）経営の食堂でちやちなステーキを時々食べたが、和食中心の海軍食ではお目にかからなかつた。幸いにも私は従軍中は雇員の先任で、雇員長副書記の職名で、上は支部長主計中佐、二年現役の主計大尉、下士官や海軍書記、奏任・判任嘱託のお歴々の末席で士官食を毎度頂戴した。海軍はなかなか階級意識が強く、先任後任の序列が厳しく、

經理学校出の士官は調理専門学を学び経費面も考えるという責任があつた。

現地の稲作は三毛作で、品質は日本米と違いバサバサしている。これの方が腐敗を防ぎ長持ちするのではないかと思う。内地各地を旅行して見ると概して硬炊きの味に現地米のことを思い出した。原住民は炊かないで蒸して食べる。小麦は全然とれない。オランダ軍の放置して行つた小麦のストックがある間はパンを焼き食卓に出たが、そのうちにストックも切れ、代わりにタピオカ（しんこんの木）でつくつたパンになつた。タピオカは真つ白な澱粉で用途は広い。タピオカパンと小麦粉パンを比較すると齒当たりと風味で劣るがやつと主食になつた。

魚は目の前に広大なマカッサル海峡があるにもかかわらず漁業は活発ではない。また獲れた魚も暖かい海のせいか魚肉は大味で食欲をそそるほどでもない。それでも寿司屋もあり烏賊イカはうまかつた。鰯スルメはビールのつまみに最高で、若かつたので

齒も良く美味しく酒盛りを楽しんだ。

現地産のパイナップルも新鮮で果物の王者ドリアンも上等で、舌に載せるとろりと融けるパイアの妙味も未だに舌に残っている。

昭和十八年の頃であった。年中常夏の当地五月は夜も早く明ける。服装をととのえ軍需部の運搬船に全員四十人（女子理事生五人共）便乗し、ポルネオの大河のマハカムの探検としゃれこんだ。途中すれ違うジャンクも日本船と見ればゆづり、まだまだ大丈夫と思った。河幅もだんだん狭くなり周囲の樹木も珍しく「さすが、南洋だなあ」と話し合った愉快な一日の行程であった。

昭和十九年十月に敵機の大爆撃があった。それ以前は内地との海上交通もそれほど悪化していなかったので食糧艦が時々寄港し、必要な生鮮食料の供給もあったが、それ以後は敵機の機雷投下による港湾封鎖も行われた。このため入港船舶は激減し、バリックパパンの主要生産品である石油、

石油製品、材木などの積み出しもままならぬようになった。

このような状況下で食糧自給はまず野菜からということになり、経理部でも自家農園を持つこととなった。元より前述の専門の食糧生産隊の指導協力も大いにあつた。庁舎の近くに適当な空き地が見つかりそこを開墾することとなった。

ところがその空き地は草ぼうぼうである。最初は鎌で草を刈り、その草を空き地の一隅に積み重ね堆肥としたが、何分炎天下の作業であるから開墾は遅々として進まない。半分位草刈りを済ますと、にわか百姓は疲労の極に達し全員地上にへたり込んだ。意気地のないことおびたらしい。平素は労働をしないから持久力がない。そこで残りの草原を焼畑農業に習い、ガソリンをぶっかけ焼き払った。シヨベルとチャンネル（鋏）で土を掘り起こしトマト、ナス、キュウリ、タマネギの種をまいた。別にバナナの木も二本植えた。三月ほどでこれらの作物は実をつけた。キュウリは気候

と土壤の関係で冬瓜トウガぐらいの大きさになったが味はまずく種は硬い。タマネギは一向に大きくならない。その中に腐るものが出て来たので収穫したが、大きさはラッキョウ程度だが味はタマネギの味がする。

バナナについては新発見をした。バナナは腰が曲がっているというのが常識であったが一番生りのバナナはそうでない。太い実が真っ直に伸び表面は赤色である。バナナといえば私等日本人は植民地台湾より入ってきたバナナの緑日のたたき売りを連想する。けれど南方ボルネオでは、大きさは水牛の角そつくりの大きさ、小さいのは大人の親指位である。

戦友はポケットモンキーを飼い戦場のつれづれを癒し肩にのせ（首輪、綱は逃亡防止のためにしていた）猿回しとはいかぬまでも愛嬌をふりまき皆に可愛がられていた。猿についてはよく猿の谷渡りという話で聞くが群猿が谷間を渡るのであ

る。手足共に握れる特性で数珠つなぎになって、いとも面白気でサーカスのようで、ワンツースリーとぶいぶい振って谷渡りをする実演を見て、人間様も顔負けでした。ただこれは敵が上陸して来て、バリックパパンより奥地の都会サマリンドへ転進の折の物珍しい風景の一コマであった。

猿もゴリラ、チンパンジー、手長猿等種類があるが、私のは見たのは大体に日本猿であったので一層なつかしく、殺伐で単調な戦闘の間の（霊長動物に対しての知識にもなり）無上の慰めでもあった。

野菜不足が続くと脚気になると昔からよく聞くが、両足がむくんで指でおさえるとポコンと落ちこむ。そうなれば真性脚気間違いなしである。私は若い頃ビタミン不足が脚気原因であると医者に聞いたが、年寄りには白米を精米する時に出る米糠を炒って食べると良いし、朝早く起き素足で露を踏むのも養生であると話してくれた。脚気症状の二、三の若い戦友にすすめたが若気の元気さも手

伝い全快した。

なお交戦し転進の際に随伴した上司の経理部長（年齢的にはちよつとした親子位）に足のだるさを訴えた。部長はさすが年の功で野草を乾かしもぐさをつくり木の枝を線香として何回も灸をすれば良いと教えて頂いた。早速試したががてきめで、今まで足重く歩くも大義であつたが数日で足取り軽くなり行軍でき、澳方も時には蘭方に優ると思つた。

制海権は勿論、制空権も失つた日本軍の敗残兵は、行軍や連絡の途次爆音を聞けばまず退避で、道路を避け、千古不伐とはいかぬけれどもまず安全地帯の木の下へ入つたが、連日の木の下での生活による太陽不足で下痢症状になつた。私はその頃蔓延していたアミーバー赤痢にとりつかれたのだと観念したが戦病死は真つ平だと心に誓つた。

同行の年老いた衛生大尉に窮状を申し上げて診断を願つたところ、大尉は「君それは太陽熱の不足の冷腹であるから務めて太陽の暖かさに当たり

腹を温めよ」と言われた。私はこの一声を有難く受け止め、お礼を申し、その通りにしたら数日後には回復し、退却もスムーズにでき、命拾いをしたのである。人間は万物の霊長と聞く。暑さや冷たさも五分五分でなくては生きて行けぬ。秋霜烈日の度合いが誠に大切であることを戦闘を通じて尊い体験と教訓を得た。

即ち上に立つ者は下を慈しみ、また下の者は上を敬い、仲良く行動することが最後に勝利を得るのであると悟つた。俗に「腹が減つては戦いはできぬ」とあるが正に名言なり。戦闘間の負傷や疾病はまず医者、薬である。次は食糧である。攻撃精神の発起も腹次第であるし、戦闘中には特に補給が大切である。

交戦中の食糧の確保補給は大変で雨ざらしの山間に一〇キロ地点毎に食糧集積所が設けられ引き退る部隊に供給されていた。私ら主計隊はその任であつたが、何分にも命を爆撃や陸攻さらに艦砲射撃で狙われ大変であつた。

昭和二十年八月十五日、終戦の大詔もやっと耳に入った。無電機も充分でなく、ここに進出していたボルネオ新聞（朝日系）の発行にも壕内で石油発電で行う位であるから、命令の伝達や広報のむずかしさが察せられるであろう。

想い起こせば昭和二十年六月十五日、絨毯爆撃に次いで、来たるべき招かざる客が到来した。

豪州軍陸軍第七師団を基幹とする三三、四四六人の大軍が、巡洋艦以下約七隻で艦砲射撃をしつつ来攻した。元より臍の緒を切つて以来初めての艦砲射撃は腹の底までずしんと応え、恐怖そのものであった。

「千早二号作戦発令」即ち引き下がり戦法である。そして七月一日豪軍主力が敵前上陸作戦に入った。爾来バリックパンより奥地の集結地サマリンドガまでを東海道線といい、そこには沼津、桑名という地名もあった。空腹をかかえての退却で駄じゃれの上質な戦友は「これがほんとの呑まず食わずだな」といった。

二カ月半の交戦後八月十五日終戦となる。今まで必勝の信念で終始していた私達も悲しかったが正直なところ命拾いをしたと思った。それでも俘虜ともなれば戦勝国のいいなりで、ボルネオの奥地で道路造りの苦難があれば、とても無事で故国の土は踏めぬのではないかと戦友と心配しあつた。

私ら海軍部隊は豪州軍主力と戦つたのであるが、しばらくしてから管理が元の蘭領東印度の主権国オランダに代わつた。とにかく敵側から日本抑留者は食糧の配給を受けた。主食は五センチ角の薄っぺらな乾パンと副食は缶詰マトン（ひき肉）が少量である。酒も甘味品もない。野生の猿が囚われ檻生活である。あてがいぶちで命だけは持つであろう。これではジャングル生活の方が自由があり自分の力、裁量で食糧が入手でき、スリルに富んで面白いではないかと思われた。

野菜は自家栽培である。感心なことに百姓経験者はいつの間にか菜っ葉を作っている。私らもバ

リックパンに住んでいた頃食糧危機が迫って来たので、食糧生産隊の指導協力で開墾し、菜っ葉を作っていたが、今度はヨーロッパ人の嗜好にあった小麦や肉類コーヒー豆の配給であるので致し方なく、日本人の生活の知恵で俄か百姓に精出し、食べられる草は極力食糧にとの研究もされた。それでも本来の食糧生産隊は違う。いち速く薩摩芋作りを始めた。

終戦後不逞の邦人、軍人、軍属共が戦時中に自分の責任で保管供給していた食糧外の物資が、所謂闇ルートで横流しし、不当の利益を得て軍用郵便所に貯蓄されているとの噂が流れた。そこで経理部の会計監査の責任上、捜査当局、法務官と同道で、調査と検査に各官庁部隊を訪れ、自分の俸給以上に貯金している者の聞き込み調査を行った。逐次検査を終えて食糧生産隊へ行った時に茶菓子代わりに出された親指大の薩摩芋の美味しかったこと、空腹がちの臓腑がびっくりしたのであった。

調査も巧妙に証拠隠滅したのや、元より貯金原簿所官庁である下関地方貯金局の原簿で調べ、さらに貯金通帳と突き合わせ、大金の出所を突き止めるのであれば万全であるが、戦争で内地との交信手段もなく、「大山鳴動し ねずみ一匹出ず」でこの件はうやむやに決着した。

野菜や配給のパンで辛うじて露命をつないでいた抑留者はどうしてもカルシウム不足になった。ところが良くしたもので経理部の奏任囑託のM氏は、水産講習所卒の大手百貨店の食品部長で、彼は艦隊酒保の責任者で来攻前までは五十歳位の働き盛りで貫禄もあつたが、マラリア患者の影響か終戦後はめつきり痩せて衰え六十歳位に見えた。彼はさすがで自分の専門の経験で人間カルシウムが欠乏すると気分がいらいらして骨折をおこしやすく、これでは引揚後、敗戦国日本再建に働く青年に悪いと、えびの殻でふりかけ製造をされたのである。

抑留生活約九カ月半で感じたことは、大和民族

は農耕民族で、稲をつくり麦も栽培し、かつ周囲皆青海原でふんだんな魚介や海藻を食べていた。その習慣の現われであるからヨーロッパの食に改めることもできない。敗者の悲惨みじめさを食事に味わった。

それに配食を受ける食器であるが等分に分配するけれども、そこは人間の慾で洗面器を食器代わりに出すものもあつたが眼の錯覚で少し残つた場合はどうしても洗面器組へ追加するという笑えぬ悪知恵を披露したのもある。

暑さのため食欲は衰えているが、その落ちた食欲を満たすほどの量は出ない。お粥のような軟らかい米の飯、その中へ野草の「ひゆ」や自分達が補食のために栽培した菜っ葉を入れる。年中今でいえば入院患者用の軽食である。今までたとえ退却途中の小屋の中でもいろいろと戦闘の状況や家郷の話等話題があつた。

敗者の抑留生活は酷暑の熱帯地で衛生設備も悪

く、医薬品も欠乏し、加えて劣悪な食事などひとつとして取り柄のない逆境である。マラリアの再発や Dengue 熱の感染が猛威をふるい正に「泣き面に蜂」である。私も遂に人並みに Dengue 熱にかかった。熱病の特徴で、手足の節々は痛むし熱は高いし勿論食欲はない。戦友も皆似たりよつたりで自分の身を守るのに精いっぱい、他人のことなどかまっておられないといった調子である。頭痛を冷すのにも氷はないし布切れで生ぬるい水で自分で頭に当てるのであつた。

私はその時ほんぜん翻然と悟つた。内地帰還という希望があるではないか、交戦数カ月、それ以前にも空襲で幾多の危険にさらされて来たではないか。風前の灯火ばかりであつたではないか。今ここで病に倒れ一命を落としては父母や郷党の方々に申し訳ないと。病に克つにはまず栄養補給が第一である、まず口から食べることであると。砂を噛む思いというがお粥のような食事を無理に流しこんだ。我武者羅とはこんなことであろう。

この一杯のお粥が病魔退散の矢となる。歡呼の聲で送られ父祖の地を立つた大和男子、今ここにあり、断じて食べ生きよと決意し断行した。さすがの Deng 熱も私の意気と内地帰還の希望に屈し、逐次回復し間もなく良くなった。

今年私は満八十六歳、敗戦後五十七年経ったが、亡き英霊のご加護により生命を永らえ、敗戦国日本の復興に微力を捧げて来た。そして余命幾何なるかは天のみぞ知る余生を、人のため、世のために尽くし、戦前・戦中・戦後を生き延びさせて頂いた証となし、世界が永遠に平和で人類が幸福になるように務めさせて頂きたいと思つてゐる。

【解説】

衣食足りて礼節を知る。

輜重^{しちじゆう}、補給を重視しなかつた日本軍、しかし、陸軍と海軍では異なる。現地調達できない海軍

は、広範囲の島々に特務艦による食糧運搬艦を行っていた。しかし、制海・制空権なく、特務艦の任務も戦争末期には遂行できず、南方現地で食料を栽培しなければならず、陸へ上がった河童が畑を耕すという姿になってしまっていた。

海軍経理部とは海軍の会計経理の元締で、海軍省経理局主任出納官史から経理部分任出納官史へ分割した経費が送金されてくるので、艦船主計長へ必要な経費、俸給、物品代の支給を行うのであるが、敵が上陸してからは、南方開発金庫発行軍票は価値が下落し、というより、反故に等しく「単なる紙切れ」になったから、経理担当官は、苦力^{ツクリ}に重い軍票の梱包を担がせ、苦力を叱咤しながら山中をさまよったのであるから、今から見れば無駄な努力であった。

中国の陸軍においても、同様な苦勞をしたが、価値ある、蒋介石軍の紙幣や、香港ドルに換金したが、不用な、軍票を破棄することもできず、その運搬には苦勞したのである。所謂、貨幣の員数

を合わせておかねばならぬため、無駄な努力をしたものである。

そして、矢野氏も、「後日知ったのであるが軍票の発行者が、軍票賠償の算定の基礎となるため、山中に置き去りにした軍票を回収した」という。まさに、敗戦国経理責任者の知られざる苦労であったと、その苦労を察するものである。

また交戦中の食料確保補給は大変で、雨ざらしの山間に、一〇キロ地点毎に食料集積所が設けられ、引き下がる部隊に供給されていたというから、矢野氏等主計隊は大変であったと推察する。

「千早二号作戦」という引き退り作戦で、七月一日、豪軍主力が上陸作戦に入り、二カ月半交戦後、八月十五日終戦となった。